

日本農学アカデミー草創のころ

中井 弘和

日本農学アカデミー第1期副会長

農学アカデミー世紀末からスタートする

農学アカデミーの創設に関わったものとして、手元に残されたわずかなメモと遠くなった記憶を頼りに、その経緯の一端を記させていただきます。農学アカデミーは、紆余曲折の末、1998年11月30日に日本学術会議において設立総会を開催して正式に発足しました。翌年の3月には第1回の理事会を開き、6月には公開シンポジウム「21世紀の農学のビジョン」を実施してその活動は順調に滑り出しました。シンポジウムは、国立大学農学系学部長会議（農学部長会議）の開催と日時を重ねるなどの工夫をして、参加者は優に100名を超えるほどに盛況で、一般の人々やマスコミ関係者などの参加も多数ありました。いずれにせよ、農学アカデミーは、閉塞感漂う20世紀末にあって、新しい時代に希望を託す風潮の只中に誕生したといえます。

設立の萌芽

農学部長会議でも、当時、すでに多くの年月を費やし新しい時代のあるべき農学像を探る議論を重ねて、1996年には『21世紀の農学のビジョン』を作成していました。これを土台にして、学術や行財政界などの諸機関と連携を計りながら、農学教育や研究の重要性を社会に積極的にアピールしようということになったのです。1993年3月30日、その一環として、農学部長会議の幹事校（名古屋大、三重大、新潟大、鳥取大、静岡大）の各学部長（並河鷹夫、久能均、小島誠、安室喜正の各氏と筆者）が、日本学術会議第6部（部長・長堀金造氏）と農水省技術会議事務局（事務局長・三輪睿太郎氏）に出向いて懇談会を持つ機会を得ました。

学術会議では第 6 部長の長堀氏ほか副部長の山崎耕宇氏、岡野健氏らが出席されました。その席で、長堀部長から学術会議（学術研究）、農水省（行政）、農学部（教育）各組織間の連携の必要性と、その連携を土台にした「農学アカデミー」の構想が情熱的に語られ、その設立が提案されたのです。農学アカデミー誕生の萌芽のときとあってよいでしょう。農水省との懇談会においては、省側から事務局長の三輪氏をはじめ 5 名ほどが参加され、やはり連携の必要性が確認されました。その折、農業・食料・農村基本問題調査会から出されたばかりの新農業基本法の間答申について特に食料の自給率の問題をめぐって率直な意見交換をしたことが印象的です。

設立の経緯

当時、学術会議第 6 部、農水省でもすでに新しい時代への農学のあり方を検討し、それらの結果はそれぞれ『21 世紀に向けての新しい農学の展開』（1997 年）、『農林水産研究基本目標』（1996 年）として報告されていました。連携の基盤は整っていたといえます。懇談会の結果を受けて、当幹事校会で農学アカデミー設立の方向性を確認し、学術会議や農水省と連携を取りながら検討を重ね、当年（1998 年）6 月と 10 月の学部長会議に提案し議論をしてようやく設立の基本合意に達したのです。短期間で農学アカデミーが誕生した背景には、長堀氏の大きな情熱と指導力があつたことを感謝と共に銘記しなければいけません。氏は、設立後は農学アカデミー第一期副会長として精力的に運営を先導しその土台を築かれました。ちなみに、この年、農水省との懇談会がきっかけとなって、農学部長会議として、新農業基本法の最終答申に食糧自給率を高める文言を盛り込む要望書を活発な議論を経て作成し、当調査会に提出したことも付記しておきます。

農学アカデミーの趣旨—環境と生命を重視する

農学アカデミー設立の基本理念の議論にかかわって、私の手元には次のようなメモがあります。「生命倫理などを含む人文・社会科学も大幅に取り込んだ総合的学術の調和的発展をもたらす農学の確立。新しい学術の方法論としてのフ

ィールド・サイエンスの創成が必要。」「日本の現状はなお『環境や生命』を軽視した工業・経済を優先した政策の流れの中にある。これは日本の将来にとって危険である。EU等の動向とかなりのズレがある。」。3.11 大地震・津波や福島原発事故を経験した今、これらの言葉は現在の日本の状況を正確に見越したものであり、さらに未来に向かう確かな予言ともなっていることがわかって胸を打たれます。残念ながら、21 世紀に入ったこの 10 年余りは、新世紀に託した希望とは裏腹に世界的に 20 世紀の矛盾が凝縮して現れた時期とってよいでしょう。メディアをゆるがせている原発事故の様相はまさにその一つの姿を示しています。

農学者の自戒から「21 世紀の農学のビジョン」へ

私は、当アカデミーの重要行事のひとつと位置づけられた公開シンポジウムの第 1 回「21 世紀の農学のビジョン」、第 2 回「農学におけるバイオテクノロジーの新しい展開」、第 3 回「持続的農業をめざした農学の新展開」の開催を学術情報委員長として担当しました。その記録はすべて、『21 世紀の農学のビジョン—日本農学アカデミーシンポジウム記録集 1999—2001』（2007：日本農学アカデミーHP、シンポジウム記録）として公表されています。そこからは、農学アカデミー草創の頃の新しい時代に向かう清新な息吹が感じられます。その最初のシンポジウムにおける佐々木恵彦氏（日本農学アカデミー第 1 期会長、当時 日本学術会議副会長）による基調講演『生物生産と環境』の冒頭の言葉が胸に焼き付いています。その「先ず、最初に環境を破壊するのが農業であったわけですが、この環境を破壊したという認識をしたうえで 21 世紀のビジョンを作っていかなければならないと思います。」というメッセージは先ずわれわれ農学に携わる者こそが精神に刻み込まなければならないものに違いありません。

3.11 から新しい時代へ

私は大学を定年後、伊豆中央に位置する大仁農場（NPO 法人「MOA 自然農法文化事業団」）を拠点にして全国 15 箇所ほどで、農家の人々の力を借りて、自然・有機農法に適応する稲の育種を行っています。また、山間の棚田を修復

して稲の栽培を試みる一方、自殺予防を目的とする電話による相談の組織「いのちの電話」や、とある少年院での情操指導（講話）などに関わりながら人生最後のコースを歩んでいるところです。現在は、農学アカデミーの活動から離れていることを申し訳なく感ずる一方、職種や専門は違っても高い志を持った多くの方たちと共に当アカデミーの立ち上げとその初期の活動に参加できましたことを何より幸いだったと感謝しています。多くの生きる示唆と力をいただきました。3.11以降の混迷の只中にある今こそ、環境や生命が重視される新しい時代へのターニングポイントであることを信じています。日本農学アカデミーがその志を実現し、新しい時代の創造に貢献していかれますことを信じお祈りするばかりです。